て過度の干渉を行い、それが政府内において問題になっていた。この「コミンテルンの役人」の中には、コミンテルン顧問という肩書きで政府の活動に関与していたブリヤート・モンゴル人活動家も含まれていた。この問題の解決のために特別委員会が選出され、その中にボドーも含まれていた。この状況はモンゴル人民政府成立後も続いたと考えられる。人民政府成立後、ボドーは辞任要求書を政府に提出するようになるが、先行研究が取り上げなかった一九二一年一二月の辞任要求書によると、モンゴル人民政府に対するコミンテルンの役人の干渉が辞任要求の原因として挙げられているのである。首相・外務相として政府の中心にいたボドーは、政府の活動に対するコミンテルン及びブリヤート・モンゴル人の関与を過度の干渉と考え、やがて反発するようになったと思われる。辞任要求は、その反発の現れという側面を持っていたのである。

これに対して、ブリヤート・モンゴル人活動家の中心人物エルベグドルジ・リンチノやコミンテルンも、「重要な党活動家が、「反動」の罠にかかってソヴィエト・ロシア、モンゴル人民党及びモンゴル人民政府に敵対するようになった」と、ボドーを位置づけるようになったのである。

このようにボドーの粛清事件には、ボドーを対モンゴル方針の中心に定めたコミンテルンと、コミンテルンの過度の干渉に反発するボドーの間の意見の食い違いが関わっていたのである。モンゴルへの影響拡大のためにコミンテルンがモンゴルに対して過度の干渉を行ったことが、モンゴルにおける人材候補とコミンテルンが位置づけた活動家の反発・対立を招いてしまい、粛清事件へとつながっていったのである。

## バフリー・マムルーク朝期における水利事業について
### ―ナースィル運河開削の経緯を中心に―

吉村武典

エジプト経済の根幹であるナイル水利の管理・維持は、エジプトを統治する王朝にとって不可欠の政策であったことは言うまでもないが、一三世紀中葉から一五世紀末までエジプトを支配したバフリー・マムルーク朝にとってもそれは同様であった。イクター制が整備された同王朝では、農業生産の安定と直結するナイル水利の整備は、政治的にも重要な位置を占めていた。カラーウーン時代に編まれた帝国統治の手引書である『アミール・キトブガーへの覚書』には、首都カイロ周辺および地方における水利機構の管理・維持を慣行（ʿāda）に従って執り行うことが記されている。しかし、これまでナイル水利に関する慣行が実際の水利機構の整備にどの程度適用されたかについて検証がなされてこなかった。そこで本発表では、バフリー・マムルーク朝時代にスルターンの命によって行われた大規模な水利事業の中から、比較的に水利事業が多く行われたナースィル・ムハンマド第三期治世（一三一〇―一三四一年）の一三二五年

にカイロ西部で行われた、ナースィル運河の開鑿事業を一例としてとりあげ、この事例を中心に他の水利事業との比較を通じて水利整備の慣行の適用について検証を行った。

ナースィル運河を採り上げた理由としては、第一に史料が豊富な点である。今回は同時代・後代の年代記、地誌を中心に一〇点ほどの史料からこの水利事業についての記載を取り上げた。このようにいくつもの史料に記事が散見される事例は、他の水利事業ではあまり見られない。第二に、この水利事業がカイロ西部という都市部で行われたという特殊な点である。多くの水利事業は、農村地帯か荒廃地において行われたが、このナースィル運河を含むカイロ周辺の運河は、ミスル運河（カーヒラ運河）を除いたすべてが、ナースィル・ムハンマド時代に開鑿・改修が行われた。そして、ナースィル運河がその中でも最も規模の大きな水利事業であった。このような特殊な場所で行われた運河の開鑿が、他の水利事業の事例と比べてどのような異同があるのかを検討するために、本発表では工期、監督官の任命、労働力について触れた。

ナースィル運河の開鑿は、ヒジュラ暦七二五年ジュマーダー・アル＝ウーラー月の初め頃からジュマーダー・アル＝アーヒラ月の終り頃まで（一三二五年四月中旬から六月中旬）の二ヵ月が充てられたが、この工期は、他の水利事業と比して長い工期であった。その理由は、建設現場が都市近郊であった為、建築物や果樹園といった施設の取り壊しを開鑿に先立て行わねばならず、時間を要したと考えられる。また、開鑿の時期はナイル河の増水が始まる（六月）前に行われたが、これについては他の水利事業と同様である。

開鑿事業の監督官には、当時のナーイブ・アル＝サルタナ（副スルターン）であったアミール・アルグーン（'Arghūn）が任命された。水利事業においては、スルターン自身が指揮を執るか、もしくは有力アミールの中から監督官が選ばれるが、その任命の基準は明確ではない。アルグーンが任命された理由は、彼が開鑿現場に果樹園を所有していたことが挙げられる。また、彼がナーイブ・アル＝サルタナであったことも理由のひとつとして考えられるが、他の水利事業の事例では、監督官の任命と官職との関連に一定の法則は見出せない為、決定的な理由とは考えにくい。

労働力についてアルグーンは、エジプト全土のアミールに労働力として彼らのイクターから農夫の提供を命じ、また各地のワーリー（地方行政官）に対して労働者を集めるように命じた。その後、アミールとワーリーにそれぞれ工事を分担させた。このように水利事業においてエジプト全土もしくは上下エジプト単位で、アミールとワーリーに労働力を提出させ、工事を分担させることは他の事例でも同様に行われていた。

また、ナースィル運河の開鑿では、事前に用地の買収が行われたことが特徴として挙げられる。工事区間内に建築物を所有する者にはマール・アル＝スルターン（政府支出）から補償が行われた。工事の完了後に運河沿いの土地はアミールに下賜されるか、売却され

たが、このように用地を国庫が買収する手続きが取られた事例は他では見られない。

このようにナースィル運河の開鑿事業は、都市部という特殊な状況下で行われたが、その他の水利事業と同様の手法で行われたことが判明した。用地の買収の例を除けば、ナースィル・ムハンマド時代までは、水利事業には一定の慣行が概ね適用されたと考えられる。今後は、このような水利事業の慣行がいつごろまで維持され、変容したのかについてさらに検証していきたい。

**〈西洋史部会〉**

## 生活改革運動 ―その本質と波及―

高橋　竜太郎

社会の急速な工業化・都市化に直面し、「自然な」「自然にかなった」生き方をしたいという希求は、工業化以降の世界に生きる人間たちが、さまざまな形態で抱いてきたテーマである。それを実現することを企図した運動が、多くの分野における包括性をもって、かつ一定の社会的影響力のもとに発生した初めての例は、世紀転換期ドイツにおける生活改革運動（Lebensreformbewegung）といわれる一連の運動であるといってよい。

この運動は世紀転換期のものとみなされることが多いが、のちに生活改革運動と呼ばれることになる個別の多くの分野において、それよりはるか以前の一九世紀の前半よりすでにその歴史的発展が始まっていた。これは、社会的な状況や、学問的・技術的な分野の変化に応じて、多様な観点から起こったものである。これは他の個別の努力と結合して、常に日常生活の新しい分野を含むことになった。そして世紀転換期に「生活改革運動」という用語が誕生し一般化することによって、集合的概念としての社会的認知を得ることが出来たのである。

多くの側面を持った生活改革運動であるから、特質を一般化して論述することはしばしば困難である。政治上の運動として出現したものではなく、また統一的な理論をも、一つのまとまった組織の形態をも持たなかった。それぞれのグループの固有の特色、ないし分野内の活動に固執する場合も多かったので、統一化は困難であった。

しかし生活改革運動は、それぞれ現在の状況に深い不満足を共通に持っており、そこからの脱却をもくろんだことが活動の原動力になっていた点において共通している。そして多くの場合、批判の対象はこの時代の都市化、工業化を背景とした人間疎外にあったのであるが、これに代わる道として、「自然な（natürlich）」「自然にかなった（naturgemäß）生活様式を送るべきである、と考えていた点で共通している。

そしてこの「Natur」ないし「naturgemäß」という用語は、各活動における随所でみることの出来る、いわばキーワードとなって